

ゆくりなく谷川岳に架かる虹見つ入りゆくみなかみ町に  
伊藤一彦

群馬県みなかみ町を訪問するときに、雪の谷川岳の上  
にちようど虹がかかった、らしい。旅先で、めつたにな  
いできごとに偶然にであった体験を歌にするのはむつか  
しいのだが、古語「ゆくりなく」をうまく使って、さり  
気ないかたちでまとめている。さすが、という感じの一  
首である。

九度目の冬は来むかふ飯館のフレコンバッグに降り  
かかる雪  
本田一弘

東日本大震災から九度目の冬である。まだまだ増えつ  
づけるだろうフレコンバッグ。十度目の冬も、十一度目  
の冬も、たぶんこのままなのではないか、そんな裏の声  
が聞こえてきそうな気がするのには、「来むかふ」の背景  
に、人麻呂の「日並の皇子の命の馬並めて御狩り立たし  
し時は来むかふ」がひびいているからだろう。過去の時  
間が現在に突出するドラマ。

ペランダより遠く眺めし首里城の消えてしまぬ穴  
のあく空  
安仁屋洋子

結句「穴のあく空」が、喪失感を的確に表現していて  
心にしみる。全焼した首里城についての作は多く見た  
が、このように自分の家から自分の目で炎上や炎上後  
を直接に見た歌ははじめて見た。報道、情報をもとに作  
った歌とはちがう切実感を読み取りたい。

一年の終りに全てが過去となる未来ばかりが書かれ  
た手帳  
武藤義哉

## 短歌の現在

### No.467 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

手帳はふつう予定を記入する。下旬、あらためてこう  
言われてみると、なるほどと納得する。工夫された表現  
と思う。私の手帳も「未来ばかりが書かれた手帳」であ  
る。その日にあったことを、日記のように書き込む人も  
いるが、例外だろう。

ギランバレー 銀河のように涼やかな名前の病に子  
は囚われたり  
曲渕江里子

子供の病気の名前に取材した取材意欲に感心した。ギ  
ランバレー症候群とは、あまり聞かない名だが、免疫シ  
ステムが自分の末梢神経を攻撃する稀な疾患で、手足の  
しびれや筋力の低下などの症状があるとのこと。ほとん  
どの人が完全に回復すると、私が見た解説にはあった。

どう見ても私の視線を意識してしかも平気で庭ゆく  
狸  
天野明

街で出逢った女性をうたうように、狸をうたっている  
ところがなんとも可笑しい。ユーモア感覚を評価した  
い。私も最近、テオの散歩中に狸と出会った。狸が住宅  
街の道路を歩いて来て、崖になっているある家の庭の垣  
根の隙間に逃げ込もうとしているのをテオが見つけた。  
テオは追おうとしたが吠えはしなかった。私も呆気にと  
られて垣根の隙間を手で触ったりした。

白田坂なつかしきかな黒きシャツの三島由紀夫は意  
外に気さく  
井関輝美

今年には三島由紀夫の没後五十年。今月のこの作者の一  
連はそれにちなんだもの。当時、井関家は三島邸の近く  
だったらしい。当時、私は河出書房の雑誌「文藝」の編